

まちづくりの要「ヨソ者、ワカ者、バカ者」 それは「まちが好きな人」から育つ

東京大学大学院工学系研究科
工学部教授

西村 幸夫



にしむら・ゆきお T.FUKUMOTO
1952年福岡生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院修了。96年より現職。専門は都市計画。96年日本建築学会賞（論文）、05年日本都市計画学会論文賞受賞。工学博士。主な著書に、「都市保全計画」（東大出版会）、「町並みまちづくり物語」（古今書院）、「環境保全と景観創造」（鹿島出版会）、「都市美」（学芸出版社）など多数。『岩波講座 都市の再生を考える』（岩波書店）、「別冊太陽 日本の町並み」（平凡社）といったシリーズの編集も手がける。また、国内各地で指導・講演を行っている。

が呼ばれて行くようなまちには、すでにそういう人はいますし、それ以外でもたいていのまちには、そのまちのことが好きな人というのはいらざるを得ないですね。各地を訪ねたとき、案内してくれるのはまちづくりグループのリーダーであることが多いのですが、何を尋ねても的確にまちの情報や歴史を答えてくれると、本当にそのまちのことが好きなんだなあということがわかります。

こんな人たちこそ 地域再生には不可欠

「まちが好きな人」が生まれやすい環境や条件は、あります。

どんなまちにもおもしろいところ、素晴らしいところがあるんです。人間が長く住んできた場所なんです。

数年前、北海道の網走に近い上湧別町かみゆわべつに行って「まち歩き」をやったんですけど、ルートの途中に開拓記念の石碑があって、一緒に歩いた人が驚いていたんですね、その石碑に自分の祖父の名前が彫ってある、と。「ずっと住んできた自分のまちなのに、旅をしたような気持ちになった」と言っていました。

他のまちにはない、自分のまち

ニッポン再活性化の大きな課題である、まちづくり。それを担うのもまた人だ。「まちづくりにおける異なる育て方」を、都市再生の第一人者が語る。

まちづくりの基本は ルールづくりよりひとづくり

都市の再生や活性化について提言や助言を続けられてきた立場から、まちづくりにおける「人」の役割について、どのようにお考えですか。

まちが好きな人がいないと、ま

ちづくりはできないんですよ。われわれの最大の目的は、地元の人たちに、まちを好きになってもらうことといってもいいくらい。

逆にいえば、まちづくりに本気で取り組む人がいれば、いい空間は自然とできてきます。制度や規制だけではまちはつくれません。ルールというのは、ともすれば単にクリアするだけのハードルになってしまっただけ、それさえ満たせば後は何をやってもOKという流れにつながりがちです。

ところが「このまちを良くしたい」「そのために何かをやりたい」

と考えて行動する人たちから見れば、ルールは最低基準にすぎないんです。それよりもっと良い方を目指す。同じルールでも、人の心の持ちようによって意味や効果が違ってくるわけです。

そういう意味で、まちづくりの基本はひとづくりだと思いますし、実際、ひとづくりのお手伝いをするのが、私たちの役割の大きな部分になっていきます。

最初におっしゃった「まちが好きな人」を育てるといふことでは



にしかないものを発見できれば、人はまちが好きになるんですよ。大切なのは、そこに気づいてもらえるかどうか。

先日行った鳥取県の若桜町というところは、岡山や兵庫との県境にある山村で、そのまた奥の集落には、人を迎えると蕎麦をふるまう習慣があるんです。ほとんどの家が蕎麦畑を持っているので、自分で栽培した蕎麦の実を自分で石うすでひいて蕎麦粉にして、それを自分で打ってふるまう。

われわれから見れば、まさに究極の手打ち蕎麦なんです。地元の人たちはそれが普通で当たり前だと思っている。その良さ、素晴らしさは、外から来た人、それもただ通り過ぎるだけではない人の方がわかるんですね。

——まちを外からの視線で見られる人も必要であると。

よく言いますよね、「まちづくりに必要なのは、ヨソ者、ワカ者、バカ者」だと。やはりヨソ者の視線は必要なんです。それは何も文字通りのヨソ者である必要はありません。まちの外からお嫁にきた女性やUターンで戻ってきた地元出身者といった人たちも、そういう役割を果たすことがよくあります。

多様な人たちが多様なまちづくりを試みている。滋賀県長浜市で（写真と本文は関係ありません）



T.NAKAYAMA

——その「ヨソ者」など、まちづくりに不可欠な人材像とは、どのよくなものでしょうか。

まちづくり運動の核になるようなキーパーソンについていえば、生き方そのものが魅力的な人のところに人は集まる傾向がありますね。「ヨソ者、ワカ者、バカ者」でいうなら、「バカ者」に当たるんでしょう。夢や理想を語るエネルギーギッシュな人、人を元気にできる人のことだと思っんです。

もちろん、夢や理想だけではダメで、ビジョンを語るだけではなく、実務をきっちり処理する能力も、まちづくり運動には必要です。これは別に一人の人間が兼ね備えていなければいけないわけではなくて、何人かで分業してもいい。

場所ごとに異なりますが、まちづくり運動では男性が元気なところも、女性が元気なところもどちらもあります。男はロマンに生き

て大言壮語する一方で、女性はいろいろな視点を持っていて現実的になれるというじゃないですか。でも、ロマンチストの女性も多いですけれどね。

運動や組織には適齢期あり 「後継者」にこだわる必要なし

——そうしたさまざまな人材を育てるにはどうしたら良いとお考えですか。

まちづくりはひとづくりと言いましたが、反対に、まちが人を育てるといふこともあります。守るべきもの、伸ばすべきものはつきり見えやすいまちほど、それを守ろう、伸ばそうとする人も出てくる。まあ、これは「鶏が先か、卵が先か」の議論になってくるんですが、まずは、最初に言ったように「まちが好きな人」をつくること、まちのおもしろさ、素晴らしさを知ってもらうことが重要でしょう。

——まちづくりに携わる人たちが、それぞれに求められるスキル（技能・技術）を高める方法にはどのようなものがありますか。

これも「まちが人をつくる」話になるのかもしれませんが、まちづくり運動が流れに乗って、ある

ところまでいくと、人は自然と育つんですね。ネットワークも広がるし、情報も入ってくる。

もちろん、本人が何もしないでいてもレベルが上がっていくのではなく、自分で勉強したり、人に教えを請うたりもするわけですが、それが自然とできるようになってくるケースが多いように思います。そうしないとまちづくりが進まないから、という側面もありますが、まちづくりは基本的に生きがいや楽しみでもある。勉強も苦にはなりにくいでしょう。

——まちづくり運動はすでに各地で起きていますが、なかには運動の硬化化やメンバーの高齢化といった課題が見えてきたところもあります。その根にあるのは、まちづくりに参加する人材の確保・育成の問題とも思えるのですが、この点についてはどのようにお考えでしょうか。

運動にも組織にも、人間と同じようにライフサイクルがあります。何かのきっかけで始まって、それが盛り上がって、適齢期を迎え、その後は衰えていく。企業や自治体などの場合は、なんとか衰えないように必死に手を打つわけですが、まちづくり運動の場合、私はライフサイクルに乗って、それに

従えばいいと考えています。若い人たちはまた若い組織を立ち上げればいい。もちろん組織自体が若返るような場合もありますが。

「適齢期」を迎えて成果を出したら、その後は無理に維持しなければならぬ義務はない。繰り返しになりますが、まちづくりは、やっている人たちにとっては生きがいや楽しみを求めている活動でもあります。

運動の継続や組織の維持が目的ではない、と。

そう。どの運動も最初は何かのきっかけがあつて、それは何か問題を解決したい、課題を達成したいというニーズでもあります。例えば町並みの保存だったり、道路拡張に対する反対だったり、中心商店街の活性化だったり、きっかけやニーズは千差万別ですが、ある程度結果が出てニーズが満たされれば、それで役目は終わっていいという運動もある。その場合、無理に続ける必要もなく「いったん終わり」ということにしてもいいんです。

新たなニーズが出てくれば、今ある組織が対応してもいいし、別の組織が出てきて取り組んでもいい。自然や景観の保全運動で有名なイギリスのナショナル・トラストも、19世紀に発足し

た当初は、用地買収の対象は貴族の領地で、その資金も富裕層の寄付によつていました。それがやがて買収の対象が海岸や森などに広がり、資金も幅広い層からの寄付でまかなうようになった。ニーズも組織も大きく変わっているわけです。

若い世代は「取り込む」だけでなく「支援」しよう

「運動」などと聞くと、どうも四角四面に構えてしまいがちなんですが、そういう義務感を持つ必要は必ずしもない、と。

中心商店街の活性化といった課題を持つグループの場合はまた違つてくると思いますが、最近のまちづくりグループには、名前に「倶楽部」とついているところが増えてきました。会員制もとらず、飲み会の延長のような形で気軽に出入りできる運動も多いですね。まさに俱に楽しむです。入りやすく、抜けやすい。

反対に、長く続いてきた運動の中からは「次の世代が出てこない」という声も聞こえますが、「次の世代」には既存の運動や組織に加わる義務はありません。自分たちのニーズにあつたまちづくりを新た

に始めてもいいわけです。

一つのまちに、いろいろなまちづくりがあつていいし、必ずしも全員が一丸となつていなくてもいい。隣あつた地域どうしがまちづくりを競うようなことがあつてもいい。

住民が一体となつて行政と対決するという図式ならともかく、今では行政もむしろ住民のボランティアパワーに期待して、手を携えようとしています。

「次の世代」というのは、取り込むだけでなく、支援する対象でもあるのかもしれない。

若い世代の中では、かつてのように都会が最高と考える人たちが減つてきています。クルマやインターネットがあれば、都市に住まなくてもモノやサービスや情報を手に入れることは簡単です。都市の便利さは取り込みつつ、田舎で余裕を楽しみながら暮らすこともできるようになってきています。

その結果、地元を見る

目が変わつて、地元を愛着を持つ若い世代が増えてきている。これまでとは違う、新しい生き方です。新しいまちづくりが起きてくるのは自然なことだし、歓迎すべきことだと思いますね。

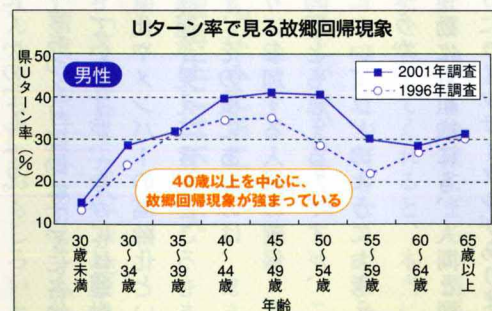
まちづくりの新たな担い手？ 中年に強まる「故郷回帰現象」

国立社会保障・人口問題研究所が5年に1回行っている「人口移動調査」によると、生まれ故郷に戻るUターン率が、40歳代以降を中心に高まっている。

2001年の第5回の調査結果では、男性の45～49歳と50～54歳で40%を超えた。また、男性では60歳以上になるとUターン率が再び上昇しており、定年後に故郷に戻る「帰還移動が要因になっている」と調査は指摘する。

注目したいのは、一部を除いてほとんどの年齢層でUターン率が上昇していることだ。し

かも、上昇幅が大きい。例えば50～59歳の年齢層では前回調査に比べて10ポイント近く上昇している。団塊世代の大量定年を機に、「新住民」が地域活性にどのようにかかわってくるか注目される。



出所：国立社会保障・人口問題研究所 第4回および第5回「人口移動調査」